
6日間成長記録

夕霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

6日間成長記録

【Nコード】

N4126V

【作者名】

夕霧

【あらすじ】

ある日、コムイの薬によってアレンが幼くなった。

それも、1日ごとに1，2歳ずつ成長していく薬。

薬が効いている6日間。アレンの運命はいかに・・・！

『プロローグ』前夜

「アレン君、ちょうどいいところに来たね！」

「コムイさん、どうしたんですか？こんなところで？」

「別に特に理由は無いよ。あ、そういえばこれ！この薬を飲んでくれない？」

「って、何ですかそのどろどろした怪しさ満点の液体は！？」

「ちょっと小さくなるだけの薬だよ。」

「絶対に飲みません」

「えゝケチだなアレン君は。ティムキャンピーに頼んで夜な夜なアレン君の耳元でクロス元帥の声を再生しちゃうよ？」

「世間はそれを脅しって言うんですよ・・・」

「頼むよアレン君！リナリーのためなんだ！またみたらし団子をおごってあげるから！！」

「本当ですか！？仕方ないですね・・・。」

「有難うアレン君！！」

そういつて緑色の液体をアレンは受け取った。

翌日、同僚が大騒ぎするなんて彼は全く思ってもいなかった。

『プロローグ』前夜（後書き）

はじめてしまいましたね……。幼児化小説……。
何か色々ごめんなさい……。

他の連載が全然更新されていないというのに……。
次回から本編です；

【第二章】 1日目 朝（前書き）

ラビ…ねえ知ってるさ？世界最小の鳥ハチドリは一日に成人男性の4倍のカロリーを消費するんだってさ。

リナリー…まるでアレン君みたいね。

アレン…そうですか・・・？

【第二章】1日目 朝

すっかり日が昇った頃、なかなか起きてこないアレンを起こすため、リナリーとラビはアレンの部屋へと向かった。

「アレンッ！起きるさっ！」

「ラビ、ノックぐらいしなよ！アレン君、起きてっ、もう11時過ぎよ！！！」

ノック無しでガバッとドアを開けてラビは開口一番にそういった。リナリーは半分呆れ顔でベッドの上の毛布で覆われらたふくらみに近づいてあることに気付いた。

ちょっと、15歳の少年にしては、ふくらみが小さい気が・・・。
そこまで思っ、ガバッと毛布を剥ぎ取る。

「リナリー、男前さっ」

暢気にぼやくラビを一蹴りしてから、ベッドの上を見てリナリーは叫び声をあげた。

ラビもベッドの上を見て驚いたかのように目を瞠る。

そこには、ぼさぼさの茶髪を適当に結ってあるよれよれの服を着た子供が寝ていた。

「アレンの隠し子さ！！」

その言葉は、教団中に響いた。



「で、科学班の研究室^{ラボ}に運んだのか・・・。」

「ええ。だって何か厄介なものの慣れしている感じがするんだもの」

「その大半は、室長のせいだ。」

・・・しかし何でこんな子供^{ガキ}がアレンの部屋に？」

ラビとリナリーはとりあえず、アレンの部屋に居た子供を科学班の研究室に連れて行った。

何度揺すっても起きなかつたので眠ったままだが。

リナリーと話合っているリーバーは、困ったかのように頭を掻いた。リナリーも困惑気味に眉尻を下げる。

「分からないの。アレン君に聞こうと思っても何処を探してもアレン君が居ないの」

「だって、その子がアレン君だもん」

「「・・・」」

「確保おーーーーー！！！」
「ギャーーーーー！！！」

机の影で隠れていたコムイがぼそつと呟く。

少しの間のあと、リーバーが叫ぶ。

と、同時に科学班の班員が網やロープを持ってコムイに襲い掛かった。

「で、兄さん。この子がアレン君っていうのはどういう意味？」

「そのままの意味だよ。僕が開発した薬をアレン君に飲ませたんだ」

「そんなことしている暇があるなら仕事をしてくださいよ！」

約一名の悲鳴が混じった抗議があつたがコムイは意図的に無視を決め込む。

リナリーも今はそれどころではないといった体で話を続ける。

「その薬ってどんな効果があるの？」

「効果？・・・それはね・・・。フッフ・・・。」

キラんとレンズを輝かせてコムイは高々と説明をした。

「この薬は7歳9歳10歳11歳13歳15歳と一日ごとに成長していく薬なのさ！」

「ということは、15歳まで成長して次の日には元の年齢に戻っているって言うこと？」

「そうだよ。もっというなら、服装もそのとき着ていたもので記憶も当時のもののなのさ！時空を捻じ曲げるのには苦労したよ」

自慢げに話すコムイを少々呆れながら見つめ、リナリーは最後の問

を投げかける。

「じゃあ兄さん。なんでそんな薬を作ったの？」

「もちろん小さい頃の可愛いリナリーを見るためさ！子供の成長は早いからね！一日おきに1，2歳ずつ成長するようにしたんだ。

けどすぐリナリーに飲ませるのは心配だから、アレン君に飲んでもらったんだ！

何故かって？神田君だったら絶対あとが怖いし、ファインダーに飲ませてもつまらないじゃないか！！

あ、それとお願いしたらアレン君が自分から飲んでくれたんだからね！」

一気にそうコムイは喋った。ついでにコムイの言うお願いは世間で言う脅しというものだったりする。

最後まで聞いたリナリーはにっこりと微笑む。

「兄さん」

「なんだい？リナリー？」

「夢の中で反省してきて」

そういうと、リナリーは笑顔のまま踵落しをコムイに食らわせた。コムイはそのまま夢の中へと旅立っていく。

「ん・・・」

それと入れ替わるように7歳のアレンが目を覚ました。

【第二章】 1日目 朝（後書き）

コムイさんがとってもシスコンですね、はい；
前書きは、豆しばかを参考にさせていただきました。
次回、アレン君が目覚めます。

【第二章】 1日目 昼前（前書き）

アレン…ゴキブリの寿命って半年から2年ぐらいなんですって
神田…オイもやし。なんで俺を見て言う

アレン…いえ、何でもありませんよ？

ただ、カンダもゴキブリ並みの生命力なので寿命も短いの
かなあと

神田…ブチッ

たたつきる！！

ラビ…つかアレンの生命力もゴキブリ並みさあ……。

【第二章】1日目 昼前

「ん・・・」

小さく唸りながら少年というには幼すぎる子供は目を覚ました。

「あ、アレン君目が覚めた？」

それに気がついたりナリーは、アレンの顔を覗き込んだ。
ラビもその隣から覗き込む。

子供はゆるゆると目を開ける。

「アレン！どこか変な感じがするとか無いさ？」

ラビが心配そうに問い掛けると、子供は顔をしかめた。

「アレンって・・・誰？」

「「「え・・・」」」

一同は、絶句した後コムイに詰め寄った。

「どういことなの兄さん！」

「自分の名前が分かってないさ！」

「記憶喪失だろこれ！」

「ちよっ！ちよっと落ち着いてみんな!!！」

いつの間にか踵落しから復活したコムイは、皆をなだめてから、目

つきの悪い子供に話しかける。

「ねえきみ、君の名前は何？」

「名前？」

「うん」

「無い」

優しい笑顔で訊くコムイに、名前の無い子供は即答する。

周りで見守っていた人々の空気がピシりと固まるのが分かった。

「じゃ・・・じゃあアレンっていう名前に心当たりは無い？」

「・・・。知り合いのピエロの犬の名前がアレンだった。・・・
もう死んでるけど」

知り合いのピエロはマナのことだろうと何処となくコムイは理解する。

そして、子供にビシッと指を指した。

案の定、子供はいきなりのことに驚く。

「じゃあ君はこれから『アレン』君だ！いいね？」

「いいけど・・・。何でわざわざ犬の名前にするんだよ・・・。つか何で俺はここに居んの？」

「それは・・・。アレがこうなって、ドガグシャーってなってるぐるしたから・・・」

冷めた目で言う『アレン』にコムイは、少し口ごもり言う。

その言葉を聞いて、全員が思った。

曖昧すぎるだろう！！

当の本人は、ふーんと興味なさげに聞いていて突っ込みはしなかった。

コムイは、スキンシップと称してベタベタと『アレン』の身体を触りまくった。

『アレン』は少し嫌がったが、コムイは、暫くベタベタと触り続けた。

「……っよし！異常は無し！ラビ、この子をお風呂に入れてあげて。服は後で届けるから。リナリー、この子がお風呂から出たら何か食べさせてあげて。分かった？」

「了解さ」

「分かったわ兄さん」

そういつて、ラビは『アレン』を浴場へと連れて行った。



「ハジメマシテ、『アレン』。俺はラビさ」

「はじめまして」

浴場へと向かう間にラビは一応自己紹介をしておいた。

「『アレン』は今まで何をしていたさ？」

「サーカスの雑用。」

「名前は無かったとか言っていたけどなんて呼ばれてたんさ？」

「・・・〔赤腕〕。俺の左腕赤いからさ」
「へ」。あ、着いたさ」

淡々と感情を込めずに答える『アレン』は7歳に見えないな。
そう考えながら、歩いているうちに浴場に着いた。

「でけ」

「初めてさ？こんな風呂」

「うん。いつも水だったりしたから・・・」
「・・・」

思わず感嘆の声を漏らす『アレン』に苦笑すると『アレン』は目を輝かせながら答えた。

そして、脱衣場で、ぼろぼろの服を脱ぐ。

肉のついていない薄い背には、痣や擦り傷が幾つもあった。
その痛々しい背中をラビは見てみぬふりをおいた。

【第二章】 1日目 昼前（後書き）

なんか、シリアスになってしまった・・・。

大丈夫！3日目ぐらいからはギャグに変わるはず！！

あと、知り合いから、7歳8歳ぐらいってリナリーちゃんが精神崩壊状態のときじゃない？そんな姿をコムタンはみたいの？と突っ込んできました。

・・・きつと何とかなるよ！！

次回は食事風景です。

【第三章】 1日目 昼（前書き）

リナリー…『もやし』の花言葉って知っている？

神田…知らん。

アレン…知りませんね……。でもごぼうの花言葉なら知っていますよ。『いじめないで』です。

リナリー…ラビに訊く方がいいわね……。ということであラビ！
ラビ…はいはい！人生、約束、幸運、生命ざっとこんな感じさ！

神田…幸運……。もやしには程遠いな！

アレン…本当に失礼ですよね、カンダって

リナリー…ラビって凄いわね。何でも知っているもの。……馬鹿
だけど。

神田…一応ブックマン後継者だからなこいつ

アレン；でもその雑学ためになることきつとありませんよ

ラビ…泣いてもいい？

【第三章】 1日目 昼

「どうだったさ？風呂は」

「すげー気持ちよかった」

ホクホクと顔を上気させて二人は風呂から上がった。

『アレン』の身体中の汚れを洗い落としながら、雑談をして、風呂から上がる頃にはある程度『アレン』はラビに心を開いていた。

「ところで俺の服は・・・？」

「ああ、あの服は汚かったから新しい服を届けてもらったんさ。それともあの服、捨てちゃいけないものだったんさ？」

「別に捨てても全然構わない」

「ほら、これ『アレン』の服さ。」

糊の利いた白いシャツと黒いズボンというシンプルな服を手渡すと少し『アレン』は困ったように眉根を寄せた。

「なあ、俺が着てもいいのか？こんないい服」

「？もちろんさ、遠慮するなさ、『アレン』」

戸惑う声に一瞬キョトンとしたラビはすぐにクスリと笑うと、15歳の頃の白い髪とは全く結びつかない茶髪をくしゃくしゃかき回した。

そんなラビの様子に着てもいいと判断したのか、『アレン』はごそごそとシャツに腕を通す。

慣れない服で着づらそうだな

そう思いながらラビも自分の団服を着た。

「ラビ、ありがとう」

「ん、どういたしまして」

唐突に投げられた感謝の言葉にラビは、風呂に入れてくれた礼だろうと勝手に解釈をして『アレン』に応えた。

ほんわりとした浴場を出ると、涼やかな空気が変わって火照った身体を冷ましていった。

「そういえば、『アレン』。腹減ってないさ？」
「別に」

ふと、思い出してラビが『アレン』に問い掛けると質素な答えが返ってきた。

アレンは寄生型だったし絶対、減っているさ！
そう決めつけてラビは、『アレン』と手を繋ぐ。

「食堂にいくさ！そこで沢山食べれるんさ！」

「はあ……。って、走るな！ちよつと待てー！」

『アレン』の言葉などお構いなしにラビは走り出した。

「……。っ、何でそんなに走るんだ……。っ。」

「ごめん、なんとなくさ」

「……………」

突然走りだしたラビに子供の『アレン』は当然着いていけず、食堂につくころには息も絶え絶えになっていた。

悪びれた様子も無く謝るラビに少し呆れた目を向ける。

「あら、どうしたのラビ？ そんな可愛らしい子供を連れてきて。」
「いやあ、ちょっと訳ありなんさ。・・・コムイ関係の」
「なるほどね。ほら、坊や遠慮なく注文して頂戴。坊やは可愛いからオマケしちゃうわよ♪」

見慣れぬ『アレン』を見て料理長のジェリーは黄色い悲鳴を上げて
『アレン』にウインクする。

『アレン』はフレンドリーなジェリーに怯えつつも注文をした。

「それじゃ、野菜スープとパンで」

「・・・それだけ？」

「だめだった？」

15歳の頃のアレンとは比べ物にならないくらい少量の料理を注文した『アレン』にラビは哑然とする。

その様子をみて『アレン』は胡乱気に訊いてみる。

そして、その間に答えたのはラビではなくジェリーだった。

「駄目に決まっているでしょっ！ ほら、坊やは細すぎるわよ。もっとたくさん食べなさい！！」

プンプンと怒りながら差し出した皿には、野菜スープとパンだけではなく沢山のおかずが山盛りに盛られていた。

『アレン』は驚きながらも嬉しそうに「ありがとう」と言った。
ラビが頼んだ焼肉も手早く調理されラビの下に手渡させた。

「そんじゃ『アレン』。あそこのテーブルが空いているからそこに座るさ」

「分かった」

「あら、ラビ。それにアレン君じゃない」

ラビに誘導され、席に着こうと思った矢先に、少女の声が鼓膜を震わした。

声の主の元に目を向けるとそこには、リナリーがトレイを持って此方にやってきていた。

「もうラビったら、食事をさせてあげるのは私の役割だったのに。浴場にいらなくて探したのよ？」

「ごめんさ、リナリー」

ちよつと怒ったように語尾を強めるリナリーにラビはへにやりと謝る。

その謝罪であつさりとラビを許すと、リナリーは『アレン』へと顔を向けにつこりと微笑んだ。

「はじめましてアレン君。リナリー・リーよ」

「はじめまして」

異性と接する機会のなかった『アレン』は軽く頬を染めて返した。その様子を見てリナリーは可愛いっつと『アレン』を抱きしめる。

「リナリー、そこら辺にしておかないと『アレン』が茹ダコになっちゃうさ。それに冷めないうちに飯食うさ」

「それもそうね。ほら、アレン君もいっしょに食べましょ」

「あ、うん。いただきます」

まだ赤い頬を振ることで冷やして、『アレン』は食べ始めた。やはり、寄生型イノセンスの所有者のためか、がつがつと勢いよく食べ始める。

「・・・美味い」

「でしょ？ジェリーさんの作る料理は何でも最高に美味しいのよ」
「たんと食うさ、『アレン』」

ニコニコと和やかな雰囲気の中、食事は暫く続いた。

最初、やっぱり我慢していたのだろうか

1，2回程度、『アレン』はおかわりをした。

そして、食事が終わりに差し向かった頃、嵐はやってきた。

「場所空けろ」

「あ、ユウ！」

「チッ」

神田の登場に、ラビが名前を呼ぶと、舌打ちが返ってきていらだった雰囲気ますます強くなる。

「神田もラビも戯れていないで。アレン君、こっちに詰めてあげて」
「もやしだと？この子供^{ガキ}が？」

リナリーの「アレン」という言葉を耳に留めて神田は眉を吊り上げて『アレン』をジロリと睨みつける。

リナリーとラビはその様子にはらはらしながら見守る。それに対して『アレン』は特に気にもせずパンをかじっていた。

「カンダ、この子は兄さんのせいで小さくなったアレン君なの。当時の記憶しかないからいじめちゃだめよ！」

「どうでもいい」

リナリーが小声で神田に説明すると神田はチッという舌打ちを返し

た。

ラビは、そんな神田に構わずに『アレン』に紹介する。

「『アレン』、こいつは神田ユウさ。無愛想な奴だけどそんなに気にしなくてもいいさ！」

「よろしく」

そう挨拶する『アレン』を無視して神田は蕎麦を食べ始めた。

「もうカンダったら！気にしないでいいのよ、アレン君。彼はもともそういう人なの。」

「別に気にしてないし。・・・俺から見れば、あんた達の方が不思議に見える」

「ん？何か言ったさ？」

「別に」

リナリーが神田の代わりに謝ると、『アレン』は気にしてないと返した。そのあと、ボソリと呟いたが二人にはよく聞こえなかった。その気まずい雰囲気のまま食事は終わり、食堂を出てラビは『アレン』に言った。

「この後は、特に何も無いから教団内でもぶらぶらしているといいさ。部屋でゆっくりしたいならその部屋を使うといいさ」

「分かった」

そういつて、ラビは食堂近くのアレンの部屋を指差した。

「あ、あとこれをちゃんとつけといてくれて兄さんが言っていたわ」

「？分かった」

「じゃあ時間になったら迎えにくるからね」

リナリーはブレスレット型の発信機を『アレン』に渡した。
『アレン』がちゃんと着けるのを見届けて二人は去っていった。

「さて、どうしよう・・・」

一人になった『アレン』はこれからどうしようか考えた。

【第三章】 1日目 昼（後書き）

夕霧 「さて、今回は会話形式のあとがきです」

アレン 「何で僕も出ないといけないんですか？」

夕霧 「ちっちゃいアレン君ばかり書いていると飽きるじゃないですか！」

アレン 「……。そういえば物語の中にティムが見当たりませんね？どこにいますか？」

夕霧 「さあ？そこら辺でもうろついているんじゃないですか？」

アレン 「それにまだ1日目なのに何でもう3章まで言っているんですか？このままでは絶対あと1，2章は1日目ですよ」

夕霧 「ご名答」

アレン 「早く元に戻りたいです！」

夕霧 「……善処します」

アレン 「……。それでは、次回も応援よろしくお願いします！」

夕霧 「感想も質問も募集中です！！読んでくださりありがとうございます！！！」

【第四章】 1日目 昼下がり（前書き）

アレン 「知ってます？ 砂漠でも魚って釣れるんですよ？」

ラビ 「知ってるさ、どっかの砂漠の一部では、小さな穴を掘って釣り糸を垂らすだけ魚が釣れるとか、 どっかの本に書いてあったさ」

リナリー 「そんなマイナーな雑学を何でアレン君が知っているの？」

アレン 「それはですね……。あれは僕が13歳ぐらいのことでした。師匠が、砂漠の砂を取って来いとか 言って、砂漠

のど真ん中に置いていかれたんです……。そのときに魚が釣れることを知ったん です。あの時は本当に死ぬかと思いましたよ……。」

リナリー 「苦労してるのね……」

ラビ 「でも何で元帥は砂漠の砂なんて欲しがったんさ？」

アレン 「さぁ……？ 珍しいものが見たかったからじゃないんですか？」

ラビ・リナリー（そんな理由で、弟子を砂漠に放りだしたのか……）

【第四章】 1日目 昼下がり

俺は、建物の中を探検するのはやめて、部屋でくつろぐことにした。

悪趣味な物がごろごろしている。物置小屋だったのか・・・？

そう思いながら、ベッドの上に寝転がった。

目を覚ますと、見知らぬところにいて、ああ売られたのかと思った。

団長も露骨に嫌がっていたもんなあ・・・。

別に売られることは珍しくない。

今まで何回もたらい回しにされている。

けど、今回の奴はどこか違った。

サーカスでは無かったし何より、今まで売られたところの何処よりも裕福に見えた。

巻き毛の調子が軽い奴は、俺に名前が無いことを知ると『アレン』と俺を名づけた。

どうしてもあの死んでしまった犬を思い出して少し哀しくなった。

その後は物心ついた中では初めての暖かい風呂だった。

新しい服までもらって、俺は本当に売られたのか疑問に思った。

今まで売られたらすぐに働かされた。

それが今回はどうだ。

暖かい風呂に新しい服。さらには、いつものように食欲を我慢して注文したら、少なすぎると勝手に増やされてしまった。

ラビは、何故か俺の腕を見ても全く動じなかった。

そんな反応をしたのはマナ以外に初めてで正直かなり驚いた。

リナリーとかいう奴も親しく話しかけてきた。

この建物にいる奴はおかしい。

今まで、そんな風に優しく接しられることがなかった俺は、こいつ等がおかしいと思った。

だから、カンダとかいうやつが露骨に舌打ちや俺を邪険に扱ったときは、ホッとした。

何でこの建物の奴らは俺を化け物と罵らないのだろう・・・。

こんなに待遇のいい扱いは初めてでもしかしたら俺は、何かの生贄にされてしまう人柱なのかも知れないなと自分で自分に皮肉を紡いだ。

そんなことをしているうちに、眠気はやってきて俺は眠った。



「やあ、リナリー、ラビ。お疲れ様」

「なあコムイ。7歳ぐらいのアレンってどんな環境にいたんさ？」

コムイに呼ばれて研究室ラボに行くと、コムイとリーバーそしてティムキャンピーが二人を待っていた。

ラビの質問にコムイは、手にしている書類をパラパラと捲りながら答える。

「うん。そのために君達を呼んだんだ。7歳ぐらいのアレン君は義父に会うか会わないかぐらいのときでサーカスで雑用をしていたんだって。」

「だいぶ今のアレンとは違っていたさ……。」

「そうだね。色々と虐待も受けていたみたいだし。擦れるのも仕方が無いよ。」

「昔は色々苦勞していたのね、アレン君も……。」

「今も十分苦勞していると思うさ。借金とか」

少し落ち込むリナリーをラビは明るく励ました。

リナリーもそれを聞いて表情を明るくする。

ちよつといい雰囲気な二人を意図的に邪魔するようにコムイは話を続けた。

「それでね。大まかに7歳から15歳までのアレン君のことを説明しておこうかって。そうしたほうが後々苦勞しなさそうだしね！

「この薬を作った時点で俺達が苦勞しているですけど、室長」

「……まあそこは気にせずに。それじゃ、説明するよ」

そこで一度コムイは眼鏡の位置を直す。

「まず、7歳ごろはさっき言ったとおり、義父に会うか会わないかぐらい。9歳の頃は義父と旅芸人をしながら各地を回っていたみたい。10歳のときに義父が死んで義父をアクマにしてしまう。このときクロス元帥の弟子になるよ。11歳まではマザーって言うサポーターに預けられていて、このあとクロス元帥と旅をしていたみたい。それで15歳のときに修行を終えて黒の教団に来たんだって。」
「…………怒涛の半生だったんさ…………。」

一気に告げられたアレンの半生にラビは呆れも含めてそういった。

「兄さん。いろいろあって忘れていたけど、この薬の抗体薬はないの？」

「ないよ。作ろうと思えば作れるけど時間かかるしく。完成したとしてもきつとその頃にはアレン君は元に戻っているよ？」

「抗体作ってから実験しろよ…………。」

「まったくだ」

リナリーの質問に答えたコムイにラビは突っ込んだ。そのラビの意見に、リーバーは賛成する。

「あ、アレン君に発信機をつけてくれた？」

「ちゃんとつけたわよ」

「よかった。あの子方向音痴だからね。はい、これを見ればアレン君が何処にいるか分かるよ！」

「お、サンキュー、コムイ」

コムイはもぞもぞとポケットを探り小さな箱をラビに渡した。

見てみると、画面には小さな丸が一つあった。

「さてと、そろそろ時間がヤバイから仕事に戻りますよ、室長。それじゃあ悪いがアレンのことは頼んだぞ。」

「わかったわ！任せて！！」

そういつてリーバーはコムイを引きずって仕事に戻っていった。残された二人は顔を見合わせる。

「それじゃあ俺たちもアレンを探しにいくさ」
「そうね」

【第四章】 1日目 昼下がり（後書き）

夕霧 「話の終わりが見えない!!」

アレン 「そうですね。1日のことを詳しく書きすぎなんですよ。」

夕霧 「だってたった6日間だよ!?! 結構さらさら」と書けそうなのがするでしょ!？」

ラビ 「けど1日で4話も更新するのは先が長いさ」

夕霧 「大丈夫、きつと1日目はあともう1話で終わると思うから。というか終わってほしい。」

アレン 「そうか。夕霧は僕が借金まみれの頃の話が早く書きたかったんですね。」

夕霧 「うう……。本当に先が長い……。応援よろしくお願いします」

【第五章】 1日目 夜（前書き）

ラビ 「アレン知ってるさ？ラッキョウでタコが釣れると言うことを！！」

アレン 「！！マジですか！？早速釣りに行って来ます！！」

神田 「がめつい奴」

アレン 「聞こえませんか？聞こえませんか？」

リナリー 「アレン君は食べ物のことになると人が変わるわね」

アレン 「そうですか？いやゝタコの餌って魚とか結構値段が高いのかなゝって思っていましたから。」

いい事聞きました。たまにはラビも役立ちますね！」

ラビ 「（さりげなくひどいさ・・・）ところで海までどうやっていくんさ？」

アレン 「方舟で」

ラビ 「（こういうのを職権乱用っていうんじゃ・・・？）

【第五章】 1日目 夜

「うん。俺お前がそんなに寝起きが悪いことを知らなかったさ」

「? 当たり前だろ。今日会ったばかりなんだから」

頭にたんこぶを作ったラビがぼそりとぼやくのを『アレン』は不思議そうに眺める。

『アレン』を探しに行ったラビとリナリーはアレンの部屋ですやすやと眠る『アレン』を見つけた。そして、『アレン』を起こそうとしたラビは寝起きの悪い『アレン』に強かに殴られたというわけだ。

「何で思い切り殴るんさ……。」

「悪いって言ってんだろ」

「大人気ないわよラビ」

しくしくといかにも嘘泣きをするラビに2人は冷たい視線を送る。

「それでこれからどうするの、アレン君? ご飯でも食べる?」

「いや、いいや……。さっきまで寝てたし。」

「じゃあこれからどうすんべ」

うーんと3人は悩む。

もう夜だしそのまま寝ることもできるが、『アレン』はさっきまで寝ていたので再び寝るのは時間が掛かるだろうし、2人ももう少しこの小さい『アレン』と過ごしたい。

「あ、そうだ。アレン君って大道芸とかって出来る? 私見てみたいな!」

「一応出来るけど」

「マジで！俺も見てみたいさ！」

「だけどそんなプロみたいな事はできねえぞ？」

「それじゃあ誰か歌える？曲があったほうがやりやすいんだけど・・・。」

「少しなら歌えるけど・・・。」

「それならよろしく」

そういつて、『アレン』は部屋の隅に転がっていた大玉に飛び乗った。

―何で大道芸をやると思ったのか分からない。

だけど、俺に笑顔を向けてくれた二人を楽しませたいと思ったんだ。

リナリーが歌い始める。

大玉の上で身軽に身体を動かしながら、『アレン』は踊った。

やや拙いながらもひよこひよここと懸命に踊る姿がどこか心温まった。

リナリーが歌い終わると同時に『アレン』は大玉から飛び降りた。

「面白かったさ『アレン』！」

「ありがとう、アレン君！」

『アレン』はちょっと驚いた後、照れくさそうにへへっと笑った。
そして・・・

バタンッ！！

「！？アレン君！？」

「『アレン』が倒れたさ！」

勢いよく床に倒れた。

二人が慌てて駆け寄ると『アレン』はすやすやと眠っていた。

「ど、どういうこと？いきなり寝ちゃうなんて・・・」

「もうすぐ1日が終わるからだよっ！」

「！コムイ！！」

おろおろとするリナリーに答えてコムイはドアの影からピョコンと出てきた。

「1日ごとに一気に成長するからね。起きたまま成長するとか何かいやでしょ？」

「た、確かにそうだけど・・・。」

「そういうことは最初に言うさ・・・」

「あははゴメンゴメン！」

呆れる二人にコムイは笑って返した。
そして二人の背中をぐいぐいと押す。

「何するさ！」

「目の前で人間がぐんぐん伸びて服も勝手に変わるところなんてホラーだよ。ぶっちゃけ、僕も成長するときどうやって成長するか分からないからね。一応部屋に出たほうがいいと思って。」

「それだったら・・・。ちょっと待って兄さん！」

「あ、リナリー！」

するりと抜け出してリナリーは『アレン』に近づくとにっこり笑った。

「それじゃあアレン君。おやすみなさい！」

小さな声でそう言ってコムイに近寄った。

「それじゃ、兄さん。行きましょ」

「そうだね。アレン君、おやすみ」

「おやすみさく、『アレン』」

そう言って3人は部屋から出て行った。

1人になって静かになった部屋で、『アレン』の身体は光に包まれた。

【第五章】 1日目 夜（後書き）

夕霧 「困った・・・」

リナリー 「どうしたの？」

夕霧 「前書きの豆知識というか雑学のストックがなくなってきた・・・。」

アレン 「そういえばいつも豆●ばとかで豆知識を探していますもののね」

ラビ 「おかげでこっちはいつもいじめられてるさ・・・。」

夕霧 「ということで、豆知識募集中です！」

ラビ 「というか前書きのところってちゃんと読んでももらえてるんさ？」

リナリー 「それ以前にこのあとがきも読んでももらえているの？」

夕霧 「心に刺さることを言うなあ・・・。」

アレン 「ま、この小説を読んでももらえているかも怪しいですもんね！」

夕霧 「今、笑顔で吐き出された言葉が一番効いたよ・・・。」

リナリー 「そういうことだから、豆知識があったら教えてね！」

【第六章】 2日目 朝（前書き）

リナリー「mamシに噛まれても死ぬのは0.5%なんだって。本でよんだわ。」

ラビ「一体どんな本を読んだんさ……。」

リナリー「『これで貴方も蛇マニア！毒蛇700種』よ？」

ラビ「後でその本読んでみたいさ……。」

アレン「そうですね。僕も昔噛まれたけど平気でしたもん」

リナリー「！？噛まれたことがあるの？」

アレン「修行の一環としてmamシを育てていたんですよ。慣れるとすごい可愛いですよ？」

噛まれましたけど。」

ラビ「そのmamシ、最終的にどうなったんさ？」

アレン「mamシ酒として師匠の糧になりました。可愛かったのに……。」

ラビ「哀れなmamシに魂の救済を……。」

【第六章】 2日目 朝

※どちらかというアニメ版に近い子アレンが居ます。原作派の方は注意してください！

「アレン君朝よ！」

「確かに強いけど、異性の部屋にずかずか入るさ？ 普通・・・」
「ラビ、蹴りたいの？」

「・・・ヤサシクシテネ」

ずかずかとアレンの部屋に入ったりナリーを見たラビはポツと頬を染めてそういった。

リナリーはそんなラビを望みどおり蹴って、ベッドへと近寄った。そして、毛布を剥ぎ取る。

そこには、すやすやと健やかに眠る茶髪の男の子が眠っていた。

左手にはミトンがはめてあった。

「・・・かわいいっ！アレン君起きてっ！朝よ！！」

「絞まってる！それ絶対絞まってるから！！」

子猫を連想させる寝姿にリナリーは思わずその男の子を抱きしめる。男の子からカエルのような声が発せられるのを聞いてラビが止める。リナリーは、少し不満な顔をしながらも男の子を解放した。ラビは男の子に近寄り頬をぺちぺちと叩く。

「おい。起きるさアレン」

「う・・・」

「お、起きたさ？」

「ここは……」

男の子はぼんやりと目を覚まし辺りを見渡した。
そして、不安な顔をする。

「マナ……?」

「マナ?……お義父^{とっ}さんのことね」

「マナは何処?」

「ええと、アレン。それは……」

「何で俺の名前知ってんの……。もしかして俺、マナに……」

「聞いてます?アレンさん?」

ラビの言葉に不審な目を向ける男の子……アレンは、一人で勝手に混乱していく。

そして顔色が真っ青になったと思ったら

「マナ……!!!」

大声でそう叫んでアレンは部屋から逃げ出した。

「あっ、アレン君!!!」

「待つさ、アレン!!!」

脱兎の如く逃げ出したアレンを慌てて追うが逃げ足は速く、すぐに見失ってしまった。

「ど、どうしましょ……。アレン君混乱しているのに……」

「だ、大丈夫さ!アレンには発信機がついてるさ!」

「!そうだったわね。追いかけましょう!」

二人は、発信機たよりに歩き出した。
その頃、アレンは……。



「マナ。何処、マナ」

教団内でマナを探していた。

捨てられたという考えが頭によぎってつい、部屋を飛び出したのだ。
マナを見つけてこの不安を消し去りたい。

そう思って、アレンは廊下を歩き続ける。
そして、気付いた。

「ここ何処……」

迷子になっているという事に。

「え、えっと……。その角を曲がったらさっきの道になるはず
だから……。」

記憶を頼りに戻ろうとするが余計頭がこんがらがる。

「あー、もう分かんない！感覚で行ってやる！」

そう言って、アレンは歩き始めた。……コムイの研究室に向かっ
て。



「な、なかなか見つからないさアレン……。」
「ここら辺だと思っただけだな……。」

アレンを追うリナリーとラビは、なかなか見つからないことに焦っていた。

リナリーが持つ発信機の画面をラビが覗く。

「あ」

「?どうしたの、ラビ」

「アレンの行く先ってコムイの研究室さ」

「それなら安心ね」

「……俺は不安さ。とにかく行ってみるさ!」



「何だここ……。何か変な物が沢山置いてある……。」

「あれ?君誰?子供は立ち入り禁止だよ、危ないし。」

「!?誰っ!」

感覚で歩き続けたアレンはいつの間にか怪しげな部屋に居た。不思議な色の液体が入っているビンがずらりと並んでいたり、可笑しな形のした置物が並んでいる。

その変なものを観察していると、奥のほうから声が聞こえてビクッと驚く。

「あれ?アレン君じゃないか。これまた昨日とは印象が随分と違って……。」

「……?あ、あのマナっていう人知らない?」

「マナ……?ああ」

白い派手な服を着た男が奥から姿を現したのでアレンは、おずおずと問い掛けて見ると、男は一瞬訝しげな顔をした後、納得したような声を出して、ちよつと考えてからアレンに答えた。

「君のお義父^{とっ}さんはね、ちよつと一人で町に仕事に行っただよ。アレン君にはちよつと大変な仕事だったからここに預けたんだよ。今日だけだから、明日になったら帰ってくるよ」

「ほんとう？」

にっこりと笑っている男にアレンが確かめると、男は大きくうんと頷いた。

アレンの顔が明るくなる。

「俺、アレンっていうんだ。あなたは？」

「僕はコムイだよ。よろしくね、アレン君」

【第六章】 2日目 朝（後書き）

夕霧 「やった！ やっと2日目だ！！」

アレン 「なんか、1日目と僕の性格変わっていませんよね？」

夕霧 「まあね。よく分からないもん。9歳のアレンなんて」

ラビ 「俺の扱いひどくないさ・・・？」

リナリー 「兄さんが無駄にいい人になっているし・・・」

夕霧 「リナリー、君は自分の兄を貶めたいの？」

リナリー 「そ、そんなこと、ならないわよ！」

ラビ 「噛んでる噛んでる」

夕霧 「けど、もうちょっとアレンは可愛かった気がするんだ・

・」

アレン 「原作とアニメのギャップに戸惑いを隠せない管理人でし

た」

ラビ 「次回もよろしくさ」

【第七章】 2日目 昼（前書き）

アレン 「モナリザって盗まれたことあるんですか？」

ラビ 「もちろん。その時はピカソが疑われたらしいさ」

アレン 「やってないのに疑われるのは嫌ですよね・・・。
連載初

ラビ 「アンラッキーボーイの宿命さ。諦めろ」

アレン 「そういわれても・・・」

【第七章】 2日目 昼

「兄さん！ここにアレン君来ていない！？」

「アレンが行方不明なんさ！」

そう喚きながら、二人は勢いよくドアを開けた。

そこでは、楽しそうに話している二人の姿があった。

「あ、リナリーにラビ！遅かったね」

「いつの間にアレンと仲良くなったんさ」

すぐに、リナリーたちに気がついてコムイは手を振る。

そして、ラビの質問に顎に手を当てながら答えた。

「そうだね。迷子になっていたから保護したんだよ。マナさんが

1日仕事でいないって言うこともちゃんとやっておいたよ」

「そうだったの、ありがとう兄さん」

説明するコムイの言葉の意味をすぐに察して二人はニコリとする。

そして、リナリーはアレンに近づくとしゃがんだ。ちょうど目線が同じ位置になる。

「はじめまして、アレン君。私は、リナリー・リーよ。この人の妹なの」

「俺はラビ。よろしくさ」

「うん、よろしく！」

二人の自己紹介が終わるとアレンは、にっこりと笑った。

リナリーが思わず抱きつく。

「やっぱり可愛い！」

「だから、締まってるって、それ絶対締まってるさ！」

「アレン君！？目の焦点が合っていないよ、アレン君！」

華奢な少女だとしてもエクソシスト。力は半端ない。真っ青になっていくアレンをラビは救出する。

「お花畑が・・・見えた気が・・・した・・・」

「ごめんね、アレン君。つい・・・」

「デジャヴを感じるさ・・・」

ぜいぜいと息を整えるアレンにリナリーは慌てて謝る。

ラビはその様子を憂いを帯びながら見ていた。

「あ、そういえばティムキャンピー知らね？昨日から見かけないんさ」

「・・・そのことなら」

「ティムキャンピー！？」

コムイは、部屋の隅を指差す。

そこには、人の頭よりも大きいティムキャンピーが転がっていた。

ラビが叫ぶとその声につられてリナリーもティムキャンピーを見る。

そして、リナリーも驚きの声をあげた。

「なんか、小っちゃくなっちゃったアレン君を見て混乱したみたい。ティムもついつい6年位前に戻っちゃったみたい」

「それにしても大きいわね・・・」

「ティムキャンピー・・・恐ろしい子・・・」

ティムキャンピーの謎にラビは戦慄がたつ。

そんなこともお構いなくティムキャンピーは、アレンに向かって飛んでいき、腕の中に納まった。

「お前・・・あのときの黄色い・・・」

「ギャオオ！」

アレンは、驚いたあとティムキャンピーの叫び声にうんうんと頷いた。

どうやら意思の疎通ができているらしい。

「よしっ！アレン君、その黄色いのを君が預かってくれるかい？名前はティムキャンピーっていうんだけど」

「いいの？」

「もちろん！」

コムイが頷くとアレンは、ティムキャンピーによろしくな、と笑いかけた。

「あ、そろそろお昼だね。アレン君、何か食べに行く？」

「行く！」

「そんじゃコムイ、アレンは俺たちが連れて行くさ」

「よろしくね！ぼくは研究に励むよ！」

「仕事しろ」

そういつて、コムイと別れた3人は取り留めの無い雑談をしながら食堂へ向かう。

「マナさんって凄い人なのね」

「うん。大道芸がとっても上手いし、面白い」

「ギャオオ！」

「うんうん、あの時はありがとな」

「何でティムの言葉が分かるんさ……。そういえばアレンはどうやってマナと出会ったんさ？」

「うーん。マナの相棒の犬と仲がよかったんだ俺。犬が死んだときに出会ったんだよ」

「その犬の名前ってアレンだったのよね……」

雑談はいつしかアレンのことになっていた。リナリーが不意にそういうとアレンはちよつと悲しい顔をして喋り始める。

「うん。マナはちよつとおかしいというか壊れているんだ。だから、俺とその犬の事がごっちゃになっているだ。^{アレン}

……。旅の目的も忘れてしまったし……。俺が……」

そこまで言ってアレンは慌てて首を振った。

「そうだったのね……。ごめんなさい、つらいことを聞いちゃって……」

「いいんだ。別に話したって困ることじゃないし」

「……。あ、食堂に着いたさアレン」

食堂では、相変わらずの賑わいを見せていた。

3人は各々好きなものを注文する。

「アレン君、好きなものを注文していいのよ。ジェリー、私はAセツトで」

「俺は、ヴォンゴレ」

「それじゃあ……。Aセットとホットケーキ」

「了解！おまちどーん！！」

ジェリーは素早く調理すると3人に手渡す。

昨日と同じ席が空いていたので3人はそこに座った。

「久しぶりだ、こんなに豪華なもん食べれるなんて！」

「もっと遠慮しないで食べていいのよ？」

「マナが言っていたんだ。何でも頼んでいい時は、相手が驚かない程度に注文しろって」

「へー、パスタ一口いる？」

「欲しい！ありがとっ」

食欲が素直になったなあ、ほのぼのとそう考えながら、パスタを一口アレンに食べさせる。

食べ終わった後、昨日と同じように3人は何をするか考えた。

「何かしたいこと無い？アレン君」

「特に……。けどこの建物を探検してもいい？」

「もちろんさ。けど、怪しい部屋もあるからな。気をつけるさ」

そういつて、ラビとリナリーはアレンを送り出した。

【第七章】 2日目 昼（後書き）

アレン 「久しぶりの投稿にしては、短文ですね」

夕霧 「仕方ないでしょ、お盆だったんだから」

ラビ 「だったらお盆ネタで何か書けばよかったんさ」

夕霧 「ラビ、後で殴らせて。私もね、忙しいんだよ色々」

アレン 「ハリポタみたり、花火やったりとですね」

夕霧 「・・・今度からは頑張りますよ！」

【第八章】 2日目 昼下がり（前書き）

神田 「イカの心臓は3つある」

アレン 「どうしたんですか、カンダ？急にノリがよくなって」

神田 「チツ・・・」

ラビ 「けど、3つもあるのは便利さ・・・。ティーズに喰われたときか・・・。」

アレン 「ラビ、それ僕に対する嫌味ですか？

確かに心臓に穴開けられた程度ならイノセンスが何とかしてくれますけど・・・」

神田 「もはや、人間が言う台詞じゃねえ」

【第八章】 2日目 昼下がり

「何処に行こうかな。」

鼻歌交じりで辺りを見渡すアレンの手には、地図。

方向音痴なアレンが活用することは無いと思うが念のためとりナリ
ーが持たせたものだった。

アレンは、地図を見てどんな部屋があるかを探してみた。

「科学班・・・？」

アレンが見つけたのは科学班フロア。その2つ下には研究室^{ラボ}がある。

「おもしろそうっ！ティムキャンピー、行ってみよう！」

目を輝かせたアレンは、ティムキャンピーを連れて、科学班のフロアへと向かった。



「班長ー、何か変な小っこのが覗いていますよ」

「ほっとけ、今は仕事に集中しろ」

ガリガリと鉛筆が磨り減る音がそこら中から聞こえてくる科学班フロアでは、科学班が未処理の報告書を処理していた。

科学班の一人が、部屋の前で立ち往生している子供を発見するとリーバーからは、冷たい返事が返ってきた。肌寒い廊下に立ちっぱなしなのは可哀想だと思った班員は、子供を中に入れることにした。

「班長、何か可哀想なんで部屋ん中入れておきますね」

「勝手にしろ」

間延びした返事を聞いて班員は子供を中に入れる。

子供は少しびくびくとしながら科学班フロアに入る。

「子供？どうしたの、見かけない子供だね」

休憩していたジョニーは見かけない風貌をした子供に人懐っこく話しかけた。

アレンは、ちょっと迷ったあと説明する。

「午後から暇で・・・、コムイって人たちが午前は遊んでくれたけど・・・。午後からはこの建物の中を探検しようと思って」

「室長が！？一体何処にいったんだあの巻き毛・・・」

『コムイ』という単語に反応してリーバーが近づいてくる。

「コムイって人なら研究を続ける～とか言っていたけど・・・」

「そうか、あの研究室か。ありがとよ。・・・ところで坊や、お前名前は？」

「え・・・、アレン」

「なっ！アレン！？」

一瞬もの凄い殺気を放出したリーバーにアレンが答える。

リーバーは驚いた後、昨日アレンに降りかかった悲劇を思い出し、涙ぐみながら頭を撫でた。

「お前も苦労しているな・・・アレン」

「？」

言葉の意味が理解できないアレンは首を傾げる。

「ま、とにかく俺はあの巻き毛・・・室長を連れ戻してくるからアレンはジョニーとでも遊んでいてくれ」

そういつてリーバーは部屋から出て行った。

残された2人は何ともいえぬ微妙な空気に包まれる。

「・・・えーと、どうする？」

「隅っこの方でじっとしている。仕事の邪魔はしないから」

「わかったよ」

そういつてアレンは部屋の隅にしゃがみこんだ。

それを見届けてジョニーは仕事に戻った。

アレンは、ときたま倒れる者がでる科学班の仕事をじっと見続けた。微動だにせず。

元々、何もせずにじっとしているのは得意なのだ。

その視線に耐え切れなくなるのは科学班。

無邪気な子供の視線が、途切れることなく科学班に注がれる・・・。
圧力のような視線に押しつぶされそうになったとき、リーバーが戻ってきた。

「リーバー班長・・・！」

科学班の面々は、リーバーが救世主に見えたとか。

「どうしたんだ、お前ら。涙目になってるぞ」

そう言いながら引きずっているのはコムイらしきもの。
そのコムイが引きずられた後には、赤い何かが付いているが気にしない。

アレンはその様子をやはり何もせずじっと見つめる。

「何か視線を感じる・・・ってうおっ！アレンか・・・」

「ん？アレン君？君、科学班フロアにいたの？」

復活したコムイの質問にアレンは答えない。

不思議に思ったコムイが、アレンの目の前で手を振ってみる。

結果は、無反応。

「こりゃ寝ちゃってるね」

「目開けて寝るのか・・・」

「瞼は閉じておこう。それがいい」

心臓に悪いから。そういつてコムイはアレンの瞼を閉じた。

「班長、どうします？」

「そうだなあ、ソファにでも寝かしておくか。いいですね、室長」
「もちろん」

リーバーは、アレンを抱き上げるとソファの上に寝かした。

そして、仕事を続けることにする。

「それにしてもアレンの髪は昔は茶髪だったんだな」

「昨日とはガラッと印象変わったな・・・」

「確かに柔らかくなったというか可愛らしくなったというか・・・」

「2年間なにがあったんだ？」

アレンの幼少期の姿なんてそう見られるものじゃない。
好奇心からか、休憩する班員は殆どがアレンを観察した。

「ほらほら、見せもんじゃねーぞ」

「あ、班長」

手を振りながら班員達を散らすとリーバーは困ったようにコムイに言った。

「これじゃあ科学班の皆が集中できませんよ。どうしますか室長？」

「うーん。アレン君も可愛いからねー。もういつそのことさっさと起こしちゃえばいいと思うよ。ほら、アレン君起きてー」

「ちよっ！室長！」

コムイがゆさゆさと揺さぶりながら起こすと、アレンは唸りながら左腕を振り上げる。

その左腕は見事コムイにクリーンヒットし、コムイは地面と合体する。

「室長！」

リーバーがコムイに駆け寄ると同時に、アレンが飛び起きる。

目が半目になっているアレンは、リーバーたちの姿を認めると低い声で言った。

「マナが言ってた。安眠を妨害する奴は遠慮なく殴れと」

だから殴ってもいいよね？

そういうアレンはもの凄く良い笑顔だった。

【第八章】 2日目 昼下がり（後書き）

アレン 「うわぁ……。びっくりするほどぐだぐだですね」

夕霧 「ぐだぐだと書きましたから」

ラビ 「というか、前書きと本文だけじゃなくて後書きもネタ切れになってきたさ。」

夕霧 「五月蠅いよラビ。」

アレン 「それにしても科学班の扱いはひどいですね」

ラビ 「特にコムイが血だらだら流してるさ」

夕霧 「大丈夫ですよ。この小説、ギャグだから。」

ラビ 「マジで？」

夕霧 「さぁ？ 私知らない。だって終わりなんて考えても無いから」

ラビ 「すがすがしい顔でいうなさ！」

アレン 「感想お待ちしていま〜す♪」

【第九話】 2日目 夜（前書き）

リナリー「ッ！カキ氷を食べたら頭痛が・・・！」

アレク「アイスクリームを食べたときに起こる頭痛のことをアイスクリーム頭痛っていうですよ」

ラビ「さすが食べ物のごときは詳しいアレクさん！」

アレク「けど僕、アイスクリーム頭痛になったことないんですよ。何でかな？」

リナリー「アレク君、それはね……。アレク君が食べる間もなく飲み込んでいるからなの」

ラビ「スゲー食道と胃さ……」

【第九話】 2日目 夜

「アレン君、もう夕方だし迎えに来たよ！」

「飯でも食うさ」

発信機を利用して科学班フロアにやってきたリナリーとラビは絶句した。

そこにはすやすやと健やかな寝息を立てるアレンと、そこに散らばる死体があった。

「アレン・・・？どうしたんさ」

そういつてアレンに近づこうとするラビの足を何かがつかんだ。

「亜qw背drftgyふじこ！？」

「リーバー班長！」

「アレンは・・・」

意味不明な悲鳴をあげるラビに構わず、リーバーは続けた。

「アレンは・・・、寝起きが・・・きけ・・・ん・・・。気をつけ・・・ろ」

「どういう意味さ？ちよっリーバー！？」

ガクリと項垂れたリーバーに呼びかけるも反応なし。

「リーバーの話しを聞く限り、この惨事は全部アレン君の仕業って事よね・・・」

「寝起きのアレンだな。」

よく見れば、硬い左腕には血痕が付いている。

「どうすればいいんさ・・・」

「そうね・・・。そうだわ！これならどうだろう」

リナリーは何か思いついたのかアレンに近づいた。そして、耳元でぼそぼそと何かを言う。

すると、アレンはガバツと跳ね起きた。

「マナッ！諦めろっあんたの歳じゃもう無理だ！！」

「リナリー凄いき。何て言ったん？」

「ふふっ。『マナさんが結婚するって』って言ったの。兄さんみたいなものね。マナさんの年齢に無理があるかなって思ったけど起きてくれたわ」

「あなどりがたし、コムイの妹・・・」

「？何か言った？」

「言っていないさ」

にっこりと笑って説明するリナリーにボソリとラビはぼやくが幸か不幸か、その言葉はリナリーには届かなかった。

「あれ、俺寝ちゃった？」

「爆睡してたさ」

「そうだったんだ・・・。ってこの辺りに散らばる死体は？」

「そうね・・・。知らないほうがいいわ」

先程のことをまったく覚えていないらしいアレンは、死体を見て首を傾げる。

その様子を遠い目で見ながらリナリーは答えた。

アレンが、ソファから降りるとアレンの下敷きになっていたティムキャンピーが飛び出た。

ティムキャンピーは下敷きにされたことを怒っているのかアレンに噛み付く。

「ガアアッ!!」

「痛っ! 噛み付くなよ!!」

「ガアアア!!」

「悪かったって!」

アレンが謝ると、ティムキャンピーは大人しくなった。

そのティムキャンピーを腕に抱えてアレンはリナリーたちに話しかける。

「それじゃご飯食べに行こう!」

「そうね!」

「死体はどうするさ・・・」

「ほっておきましょう。いつか目覚めるわ」

そういつて、3人は食堂へ向かう。

「あ、アレン君! そっちは食堂じゃないわ!」

「あれ? そうだっけ・・・?」

食堂へ向かう途中、アレンが一人違う道へ行こうとしてリナリーは引き止める。

その廊下の向こうは真っ暗で怪しげなオーラが漂っていた。

「こんなところあったっけ?」

「いんや。こんな怪しげなところ見たこともないさ」

「行ってみたいな・・・」

「マジ！？やめた方がいいさ」

「ラビったら！それでも男なの？」

「漢には譲れねえもんがあるんさ・・・」

「かっこつけて言ってもかっこよくないわよ」

「あの・・・」

見覚えの無い廊下にリナリーは興味津々だが、ラビは行きたがらない。

口喧嘩に発展しかけたときに、アレンがおずおずと話しかける。

「晩飯、食べに行かない？」

「もちろん！食べに行きましょう！」

首を傾げて言うアレンにリナリーは心打たれて、意見を180度回転させてアレンの手を引っ張って食堂へと向かった。



「あ、兄さん！生きていたのね」

「うん。死の淵から蘇ってきたよ」

食事をしていると、コムイが同じ机に座った。

イカスミパスタを啜りながらラビはふと思い出してコムイに問い掛けた。

「そういえば食堂（食堂）に来る途中、怪しげなところを見つけたんさ」

「そうそう。見たこともないところだったわ。兄さん知ってる？」

コムイは、コーヒーを飲みながら考える。

「うーん。思い当たるところはあるよ。昔ね、とある・・・人体実験に耐え切れずに逃げ出した子がいたんだ。その子は教団内のあるところで力尽きちゃったんだよ。それがまた、分かりにくい入り組んだ道らしいんだけどね・・・。それ以来ずっとその場所に縛られ続けていてね、その場所に誘われた人は二度とその場所から出ることは出来ないらしいよ。良かったね、行ってなくて。・・・ん？顔色が悪いよ、2人とも？」

「アレンには感謝しねーといけねえな」

「・・・そうね。はい、アレン君。私のプリンあげるわ」
「・・・？ありがとう」

コムイの話を聞いて真っ青になったラビとリナリーはさっき、途中で行くのを止めたアレンに感謝した。

アレンは、リナリーからもらったプリンを頬張ると幸せそうに笑った。



「さてと・・・。ご飯も食べ終わったらし、アレン君お風呂に入ってくる？」

「いいの？」

「もちろんさ、そんなじゃ行くかアレン」

食後、ラビとアレンは、浴場に行くことにした。

「うおおお！なんと大きな温泉だ！」

「おー、はしゃぎ過ぎて転ぶなよ」

「そんなヘマしないよー！……うぎゃっ！」

豪華な浴場にはしゃぐアレンを注意すると注意したとたんにアレンは滑って転んだ。

それをみてラビは、大爆笑する。

「アハハハハッ！アレンツ、おまつ……言ってるそばから転ぶか？普通っ……！」

ヒーヒーと腹を押さえるラビにアレンは、むっとした顔になる。そして、いきなりラビの足元を払った。

「おわっ！痛ってー！」

「ふん！ざまーみろっ！」

ベツと舌を出すアレンをラビは湯船の中に沈める。

息がろくに出来ない状態にアレンはもがく。

そして、ラビが手を離すと今度はアレンの反撃が起こる。暫くその繰り返しだった。



「それでのぼせたのね。呆れた」

30分後、談話室のソファでぐったりする2人にリナリーは呆れながら水を差し出した。

「それがさ、アレンが身軽なんさ、驚くぐらいに。水あんがと」

「だがらって、奥義『竜巻落とし延髄斬り』をやらなくっちゃいいじゃないか」

「何なの、その『竜巻落とし延髄斬り』って・・・」

リナリーは呆れるだけではなく冷たい目でラビを見つめる。
ラビが代弁しようとしたとき、コップの落ちる音がした。

「!？アレン君っ？」

音を発した元、アレンはソファの上で力無く横たわっていた。
一瞬驚いたリナリーだったがすぐに、あの一日が終わって成長する
影響が出たのだ。

ラビが、アレンを抱き上げてリナリーに言った。

「そんじゃあ、アレンは俺が部屋まで運んでおくさ」

「そう、お願いねラビ。・・・おやすみなさい、アレン君」

リナリーは、そう言って2人を送り出した。

【第九話】 2日目 夜（後書き）

アレン 「今回は長かったですね」

夕霧 「二つに分けたほうが良かったかも」

神田 「ぐだぐだうるせえんだよ」

アレン 「うわっ、どうしたんですか神田？」

夕霧 「きっと本編で出れなかったからだね」

神田 「うるせえ！」

アレン 「八つ当たりはいけませんよ」

神田 「だいたい何でテメエはいつも出てんだよ」

アレン 「だって、主人公ですもん」

夕霧 「………ということで質問・感想まってまーす」

アレン・神田 「どういうことだよ！」

夕霧 「仲いいね」

アレン・神田 「いくない!!」

【第十章】 3日目 朝（前書き）

ラビ 「イルカはな、完全に寝るとおぼれるから右脳と左脳を交代して寝るんさ」

アレン 「へー、そうなんですか」

リナリー 「アレン君、棒読み・・・」

アレン 「でも科学班にとってもは羨ましいかもしれませんね。」

リナリー 「た、確かに・・・」

【第十章】 3日目 朝

「よっすアレン！おはようさん！」

勢いよくアレンの部屋のドアを開けたラビは、ベッドの上にアレンがいないことにすぐに気がついた。

「・・・？アレン、どこさ〜！」

そう呼びかけながら、ラビは薄暗い部屋へと足を踏み入れる。床に転がっていたボールが足に当たって転がる。

そのボールが転がる先には、アレンがいた。

ラビは、そのアレンの姿を見て絶句する。

アレンは、部屋の隅でうずくまっていた。

昨日と同じ衣装に身を包む彼の変わったところは、茶髪から白髪になり、昨日は無かった赤い引き攣った呪いが頬に走っている。

そして、何より変わっていたところは、昨日まで銀灰色の瞳を輝かせていたモノが今は全く無いということだった。

――10歳のときに義父が死んで義父をアクマにしてしまう・・・
1日目に言っていたコムイの言葉が頭に横切る。

「アレン、大丈夫なんさ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一度、呼びかけてみてもアレンは返事をせず、泣きも笑いもせずにとただ虚空を見つめていた。

「とにかく、コムイを呼んで来るさ。それまで部屋でおとなしくし

ていろよ!」

ラビはそう言って部屋から飛び出た。返事は無い。返事は期待していない。ただ、言っておかないとアレンがどこかに消えてしまいそうな気がしたのだ。



「・・・っ! コムイはいるか?」

科学班フロアの扉を勢いよく開けてラビは、そう叫んだ。

「室長ならそこにいるけど・・・」

ラビの焦り具合を訝しげに思いながらもジョニーが指差す先にはコムイがいた。

「コムイツ!」

「あ、ラビ! やっほ。アレン君の調子はどう?」

「そのアレンのことなんさ!」

科学班フロアまで全速力で走ってきたラビは呼吸を整えながら言った。

ラビの真面目な態度にコムイも戸惑う。

「どうしたのさラビ?」

「今日はアレンが10歳になったんさ!」

「それがどうかしたの?・・・っ!」

一瞬胡乱気に問い返した後、すぐにコムイは顔色を変えた。

「そうか10歳といえば義父をアクマにしてしまった歳か・・・。
迂闊だった!」

「そんなことよりもアレンの様子がおかしいんさ。話しかけても反応しない」

「一時的なショックで神経が麻痺しているのかも。まだ彼は子供だから」

とりあえずアレン君のところに行こう
そう言ったコムイにラビは頷いた。



：暗い。真っ暗闇で何にも見えない

確かに俺の目には映っているものも、頭の中には入ってこない
マナをアクマにしてしまった時から俺の世界は壊れてしまったんだ。
2回もマナを壊してしまった。

そのことが悔しくて、悲しくて

現実から目を逸らしたくて俺は暗闇を漂う

楽しい頃の自分に戻って偽りの温かさに触れ続ける

だれも俺に構わないでくれ

もう、構わないで



「アレン君!」

ノックをしても無意味だと判断したコムイは、そのままの勢いで部

屋の中に飛びこむ。

部屋の隅に縮こまる小さな影にすぐ気がついた。

「アレン君・・・」

薄暗い部屋の隅にいる少年は真っ白なはずなのに、その闇に溶けてしまっただった。

コムイはアレンに近づくと、身体に異常がないか調べる。その間もアレンは微動だにしなかった。

「・・・うん。身体には異常はないね。やっぱりショックのせいで心が凍っちゃってるんだろうね」

「ということは暫くはこのままってことさ？」

「たぶん、ね。アレン君の話では立ち戻るのにけっこう時間がかかったみたいだよ」

何ともいえぬ寂しさを含んだ表情でコムイはそう言った。

部屋の隅から動こうとしないアレンに毛布をかけて、ラビは困ったように眉をよせた。

「・・・暫くそつとして置いたほうがよさそうさ？」

「うん。そうだね。リナリーにはラビが言っておいてくれるかい？」

僕はこれから仕事があってね」

「分かったさ」

そう言って、二人は部屋から出て行った。



「リナリー！」

神田と何やら話していたリナリーを見つけてラビは声をあげた。リナリーはきよとした表情でラビを見つめる。

「ラビどうしたの？・・・もしかしてアレン君のこと？」

勘の良いリナリーはすぐに、アレンのことだと気付く。

ラビは、リナリーにアレンのことを話した。

「・・・そうなんだ。確かに今日はそっとしておいてあげるべきなのかもね」

「・・・チツ」

話を聞いた後、リナリーはぽつんと呟いた。そして、そのあと神田が舌打ちをする。

「ん？どうしたんさ、カンダ」

「気に入らねえ」

神田はただ一言そう言ってその場から去って行った。

「何だかんだ言ってカンダもアレン君のことを心配してるのね」

「そうそう。ちょっと不器用なだけさ、ユウは」

「その不器用なカンダは何処に行ってしまったのかしら」

「アレンのところじゃね？ユウなりに励まし行っただとか」

「カンダの励まし方って罵詈雑言を浴びせるわね、きっと」

「・・・アレンのところに行くか」

「そうね」

言葉を交わしていくうちに血の気が引いていくラビを横目に、リナ
リ―は歩き出した。
―向かうところはアレンの部屋

【第十章】 3日目 朝（後書き）

何だかシリアスなので、今回の後書きにはアレンたちは出しません。206夜ぐらいに10歳ごろのアレンが詳しく描かれているみたいなんですがあいにく私はみていません；

ということで完全捏造で3日目は書いていきたいと思います。

アレンが軽く鬱っぽくなるかもしれないので、気をつけてください。

【第十一章】3日目 昼（前書き）

アレン 「というか、15歳の僕の出番はここしかないから、一番僕の出番が少なくありません？」

ラビ 「気にしちゃいけません！」

アレン 「そういえば今回は豆知識じゃないんですか？ ついにネタが切れたんですか？」

夕霧 「そんなわけ無いでしょ！」

ラビ 「あんたは後書きだけに出ていればいいさ。それじゃ今回の豆知識をどーん！！」

アレン 「蜘蛛にコーヒーを飲ませるとでたらめな蜘蛛の巣を作ります！」

ラビ 「どうでもいい豆知識ありがとう！！」

【第十一章】3日目 昼

「おいモヤシ！」

ノックもせずに乱暴に開けられた扉を見ることもなく、アレンは部屋の隅で蹲っていた。

焦点の合っていないアレンを神田は罵倒する。

「このノロモヤシ！そんなんだからテメエは！」

その後、約5分ぐらい罵倒が続いたが、アレンは無反応だ。そしてラビとリナリーが部屋に駆けつける。

「うわー、ユウ。凄い罵詈雑言を吐き続けているさー」

「カンダ落ち着いてっ！」

リナリーは、ひとまずポカリと神田を殴る。

頭を押さえた神田は、ギラリとリナリーを睨む。

それに負けじとキツとリナリーは睨み返しながら言った。

ラビは、拍子抜けしたような顔でへらりと笑った。

「リナリーらしいこと言うさ。」

「15歳のアレン君だったら、いいかもしれないけど、今彼は10歳なのよ。だから、そっとしておいてあげて」

「それが甘いつて言ってるんだ。あいつは、何だかんだ言って強い奴だろう」

「だからカンダが言っているアレン君と今のアレン君は違うでしょ・
・・」

半ば呆れを含んだ目でリナリーは神田を見下す。

リナリーは敵に回したくないさ・・・と思っていると、ラビがぼそりと呟いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何て言っただんさ、アレン」

「・・・・・・・・うるさい・・・・・・・・ってくれ」

小さくてよく聞こえないぼやきに耳を澄ませると最初よりずっと鮮明に聞こえてくる。

「うるさい・・・、ほっておいてくれ・・・！・・・現実を見たくない・・・。俺なんていなくてもいいだ・・・。誰にも必要とされないんだから・・・」

血を吐くような呟きにリナリーは顔を歪ませる。

それに対して、神田はますますイラついた表情になる。

そして、アレンに向かって吐き出すように言った。

「現実を見ろ、バカモヤシ。現実から逃げたって、手前が義父を壊したってことには変わりねえんだ」

リナリーは、今度は神田を止めることはせずに、ぎゅっとアレンの手を握る。

「そうよ、アレン君。あなたにはいつか、あなたを必要としてくれる人や大切にしてくれる人ができるのよ。・・・・・・・・私たちは仲間よ？」

まっすぐな瞳にアレンは、揺らぐことなく焦点の合わない目でリナ

リーを捉える。

「出て行って・・・」

その言葉に、リナリーは少しがっかりして、3人は部屋から出て行った。



暗い闇の中、激しい口調で何かを言う声が聞こえた
それはまるで、俺を罵っているように聞こえた
現実から眼を逸らすなって言っているみたいだった
うるさい お前に何が分かるんだ
そういった気がする

そのあと、黒い輝く眼がこっちをまっすぐに見てきた
今の俺とは正反対の目

その目の主は諭すように何かを言った
あなたにはいつか仲間ができるわ
何が仲間だ

どうせ？アレン？やマナみたいに、俺が守りたいと思った瞬間に消えてしまうんだ

俺は、その瞳に視線を向けて言った

"うるさい 出て行って"

その瞳とあの声はあっさりと消えていった
また静かな闇に包まれる

彼は気付いていない。

何を言っても何も見ていない、聞いていない彼が、その声に反応したことに



「効果は無しみたいだったわね」

少ししょんぼりとしながら言ったりナリーにラビは慰めるように頭を軽く叩いた。

「大丈夫さ。いつものアレンはあんなに元気さ」

「だからこそ、よ」

リナリーは、静かにそう言った。

「いつものアレン君は一人で抱えて押さえつけているだけなのよ。わたし達は仲間なの。助けたいと思うのは当たり前でしょ？」

「何か食い違っているような気がしますヨ・・・？」

「と、とにかく！例えたった一日でも仲間が悲しんでいるところを見たくはないの！」

ずばっとラビを指差してリナリーは言った。

ラビは、拍子抜けした顔をしてへらりと笑った。

「そーいうところはリナリーらしいさ。さて、もう昼だしなんか食べに行こうさ」

「あとでアレン君にも届けてあげないと」

「あのもやしがそれを食べることは無いと思うがな」

「もうカンダったら！すぐにそうやって言うんだから！」

そう言って、3人は食堂へ向かう

【第十一章】 3日目 昼（後書き）

アレン 「今回は痛い話でいっぱいでしたね」

夕霧 「というか、マナを壊したばかりのアレンでギャグにいく方が凄いよ」

ラビ 「痛いよこの人痛すぎるよ。絆創膏持ってきて、一人包めるくらいのこと」

夕霧 「ラビさりげなく銀〇のパクリだ。どうせ次回もシリアスだから」

アレン 「なにそれ凄い嫌です」

夕霧 「拒否権はありません」

【第十二章】 3日目 昼下がり（前書き）

アレン 「ナマズは全身で味を感じるんですよっ!!」

ラビ 「そんな力強く言わないでください、アレンさん」

アレン 「だって凄いと思いませんか？」

ラビ 「…もし全身の味覚が発達したらアクマを倒したときとか
アクマの味がするんじゃない？」

アレン 「ラビ…、あなたって人は…。夢をそんなに壊したいんですか!？」

【第十二章】 3日目 昼下がり

「ふう、満腹さ」

「暢気なものねえ」

食事を終えた3人は、アレンに昼食を届けるために部屋へと向かっていた。

ラビが野菜スープをお盆に載せて運ぶ。そしてリナリーの手には怪しげな液体が入った瓶が…。

「……リナリー、一つ聞いてもいいさ？」

「何？ラビ」

「その液体ってなんさ？」

「兄さんが渡してくれたの。どうしても食べなかったらこれでも飲ませてくれて」

おそるおそる聞いたラビにリナリーは微笑みながら瓶を見せる。たぶんっという音が聞こえそうな液体は栄養剤や、薬とは程遠い何かを連想させる。

「それは、これを飲まなかったときの最終手段にしようさ。……絶対に」

「そう……。カンダ、飲んでみる？」

「誰が飲むか。んなもん」

「冷たいわね」

「いや、自分がかわいいんさ」

そんなことを話しながら、ラビはアレンの部屋のドアを開けた。

ノックをしても返事は無いのでノックはしない。
ドアを開けると、相変わらず動かないアレンが視界に入る。

「お、アレン。飯持ってきてやったぞ」

「……………」

無反応なアレンを前に、ラビは少し考えてからアレンの前にスプーンを置いた。

そして、手で仰いでスプーンの美味しそうな匂いをアレンに送る。

「ほくらほら。美味しそうだろ」

「不審者みたいだな」

食べ物で子供を攫う不審者のようなラビに神田はぐさつと言言った。

しかし、そのラビのスプーンの匂いに釣られてアレンの手がスプーンに伸ばされかけた。

だが、スープ皿に手が触れる前にアレンは手を引っ込めた。

「あらら…、失敗しちゃった？じゃあこの液体の出番ね…」

「リ、リナリー！もうちょっとスープで粘ってみようさ！」

「仕方ないわね…」

瓶を構えるリナリーをラビはなだめる。やっぱりあの液体はどうみても怪しい。

ラビが、再び匂いを送ってみるが、今度はアレンは釣られなかった。

「やっぱり無理さ…。ユウ！お前の人でなしモードでアレンに何か食べさせてみるさ」

「俺のファーストネームを口にすんじゃないわねえ。・・・チツ」

舌打ちしながらも神田はスープをアレンずいっと近づけた。

「食え」

「・・・・・・・・・・」

一言そう放った神田にアレンはゆるゆると目線を合わせる。
そして冷めた目でアレンは言った。

「誰が・・・食うか・・・。。馬鹿」

「んだとテメェ・・・」

「カンダ、子供相手に剣を抜かないの」

どこか小馬鹿にしか口調で言ったアレンに神田が斬りかかろうとする。
リナリーは、神田を押さえて瓶を取り出した。

「やっぱりこれしかないようね」

「・・・・・・・・オネガイシマス」

うふふ、と不敵に笑う彼女をラビは止めることは出来なかった。

リナリーは、トンとアレンの頭に優しく手を載せる。

焦点の合っていない目を見つめながら、リナリーは聖母のように微笑む。そして：

「ゴフツ！？」

「好き嫌いはいけないよう？アレンくん」

頭をそのまま固定して、口に瓶を無理やり突っ込んだ。
そして、そのままアレンの体内に液体は流れ込む。

「――――ッ!!!!!!」

「百面相ね、アレン君」

顔を赤くしたり青くしたりしながらアレンは声にならない悲鳴と呻きを混せて叫んだ。

その様子を見てラビは静かに手を合わせる。やっぱりまともじゃなかったか。

リナリーは、苦しむアレンを傍観する。

なおも苦しむアレンをどこか哀れむ目で神田はスープを差し出した。アレンは、それを受け取り口直しに飲み込んだ。スープを何回か飲んだあと、ラビに押し付ける。

「ん？もういいのか？」

「：飲みたくない」

「まあ少しは飲んだからいいか」

暢気に話す3人はアレンが、やはり何処にも目を向けていないことに気付いていた。

3人が沈黙すると、アレンは先程と変わらずぼうつと虚空を見つめる。

「……それじゃあ、アレン君。夜も来るからね」

返ってくるのは無言。

けれど、アレンが少しこちらを見たことにリナリーは満足して部屋から出て行った。

「なかなか立ち直ってくれないわね…」

「仕方が無いさ、それぐらい大切なものだったんだから。実際も半年ぐらい立ち直るのにかかったらしいさ」

「……そう、なんだ……。早く元気になってくれるといいんだけど……」
心配そうにリナリーとラビは呟いた。



まだ口の中に残る違和感を感じながら闇に身を任せる。

何で彼らはこれほど俺に構うのだろう

今まで何も聞かずに耳を塞いでいたのに、何でその隙間から彼らの
声が聞こえるのだろう

少し目を開けてみたい

けどそれはマナとの思い出から離れるということだ俺はまだ離れた
くない

まだ、過去に戻っていたいんだ

そう思ってたきゅっと手に力を込めた

【第十二章】 3日目 昼下がり（後書き）

最後の方が痛いですね…。そしてなにを書きたかったんだわたし…。前回からちよつと経つての投稿です。

早く馬鹿弟子時代のアレンが書きたいです。ギャグに戻りたいです…。

感想等々お待ちしております…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4126v/>

6日間成長記録

2011年10月7日22時24分発行